

心房細動と死亡との関連、45年間で経時的変化はみられず

新たに診断された心房細動と死亡との関連において時間的傾向を調査するため、地域住民を対象としたコホート研究を実施した。

米国マサチューセッツ州のフラミンガムで1972-1985年(第1期)、1986-2000年(第2期)、2001-2015年(第3期)の各期間において、45-95歳の心房細動がない参加者と、新規に心房細動(または心房粗動)と診断された者を対象とした。心房細動のない参加者は、第1期5,671例、第2期6,177例、第3期6,174例となり、新規に心房細動と診断された参加者はそれぞれ305例、596例、468例であった。時間的にばらつきのある心房細動と全死因死亡とのハザード比を、時間的変化の交絡因子を補正して算出したところ、補正後のハザード比は第1期が1.9、第2期が1.4、第3期が1.7であった(傾向の $P=0.03$)。また、心房細動の診断後10年時点での心房細動群と適合参照群の平均生存期間の差を算出したところ、31%短縮し、第1期では-2.9年、第2期は-2.1年、第3期は-2.0年短くなっていた(傾向の $P=0.03$)。

したがって、心房細動と全死因死亡との関連において、この45年間で経時的変化はみられないことが明らかとなった。心房細動診断後10年時点での平均喪失年数は顕著に改善したものの、心房細動と診断されていない者とは依然として2年の差があることも示された。

出典: British Medical Journal. 2020 Aug 11; 370: m2724.